

目 次

—日 程—

開 会

金ヶ崎町教育委員会教育長あいさつ

南方地区自治会連合会 会長 西 久雄氏あいさつ

講演

演題「鎮守府胆沢城から鳥海柵へー在庁官人安倍氏の誕生ー」… 1

講師 宮城学院女子大学教授 大平 聡 氏

シンポジウム

コーディネーター 元北上市博物館 館長 本堂 寿一氏

パネラー 宮城学院女子大学 教授 大平 聡氏

花巻市博物館 館長 高橋 信雄氏 …15

秋田県埋蔵文化財センター

主任文化財専門員兼班長 高橋 学氏 …17

参 考 資 料22

質 疑 応 答

閉 会

講演

宮城学院女子大学 教授
／ 大平 聡氏

鎮守府胆沢城から鳥海柵へ ー在庁官人安倍氏の誕生ー

宮城学院女子大学人間文化学科
大平 聡

はじめに

フロンティアの北上ー37 年戦争

北上川中流域の面的支配ー胆沢城 - 志波城（徳丹城）による奥六郡支配体制の始まり
胆沢鎮守府の成立→受領官鎮守府将軍による奥六郡支配ー陸奥国南北二元支配体制論
〔熊谷：1994〕

近年の批判ー鎮守府将軍＝軍事指揮官、民政＝陸奥国府（多賀城）派遣官人〔渕原：
2002〕

課題 9 世紀初めの支配体制から、どのような経緯をたどって安倍氏の時代になり、前
九年合戦に至ったか

（1）安倍氏の位置づけ

①共通認識ー胆沢鎮守府（胆沢城）在庁官人安倍氏

出自論ー蝦夷 ⇒必然的結果としての前九年合戦

安倍氏 12 柵ー北上川支流の北岸＝中央政府との対峙

↓

当然の見方という「常識」

↑

単純な図式的理解＝思考停止状態

②安倍氏出自論の見直しー下向軍事貴族論の出現〔戸川：1999〕とその影響？

出自論に基づく、中央政府との対立の発生論《前九年合戦の安倍氏出自必然論》
を超えられたか

（2）「鳥海柵＝対中央政府軍事拠点施設」の見直し（委員会参加の成果）

鳥海柵跡発掘成果の衝撃ー胆沢川縁に発掘された安倍氏の時代以前、胆沢城全盛期の

四面庇建物の存在—安倍氏以前の時代からの土地利用＝胆沢城関連遺跡

⇒胆沢川は蝦夷世界と中央政府の境界ではない（胆沢－志波〈徳丹〉体制から考えれば当然の理解）

（３）「五保」墨書土器・香炉・緑釉唾壺の出土の意味

①胆沢城出土遺物との均質性—四面庇建物との強い関連性

⇒胆沢城関連遺跡＝胆沢城勤務官人の居住地域

胆沢川北岸も支配領域であることを主張し、いざという時、胆沢城に逃げ込める位置

②「五保」の文字の重要性

蝦夷の地の面的支配—律令制支配の大原則〈個別人身支配〉原理の適用

律令制支配の理念の実現地としての陸奥国—奈良時代からの「伝統」

奈良時代の陸奥国支配方式＝「柵戸」（軍事移民）方式

胆沢城時代の支配方式＝「夷をもって夷を制す」〔熊谷：1992〕

現地住民を対象とする個別人身支配—有力蝦夷の取り込みと蝦夷間対立関係の利用

③奥六郡支配体制の歴史的特色

蝦夷首長層の組織化—官僚制と異なる論理

→人格的主従関係の重要性＝「在庁官人」体制との順応性

受領（中央派遣官＝国司長官を最高権力者として、国司三等官以下の無力化、かわって国司長官従者〈郎党〉の下向と現地支配＝「在庁官人」の誕生、そして土着化）

（４）在庁官人安倍氏の誕生

①陸奥へのあこがれ

多くの歌枕

清少納言『枕草子』243段「社は」にあげられた「花ふちの社」（鼻節神社）

珍奇なる財の積み出し港・国府津塩竈の湾口を扼す半島の突端

昆布（えびすめ）・毛皮（海獣・熊）・鷹の羽・馬・金

②奥六郡の「支配」と北奥世界との交易

官僚制より、人格的关系の優位な環境としての陸奥

→在庁官人の活躍の場・陸奥

③在庁官人安倍氏の誕生

「出自」論の持つ意味と、「在庁官人安倍氏」論の持つ意味

→前九年合戦の決定的原因は何か—在庁官人と陸奥国司・鎮守府將軍

④陸奥と莊園制

摂関家領が多く置かれた陸奥〔大石：1986〕

→利権の交錯する陸奥北半～北奥

おわりに一前九年合戦を考える

安倍氏の歴史的な性格—在庁官人を前提として解釈すべき課題

「出自」論に基づく解釈からの脱却、しかし「出自」論の有する独自の課題

受領官と在庁官人間の矛盾—日本史一般の課題

陸奥国特有の構造 蝦夷首長—在庁官人—国司・鎮守府将軍（軍事貴族）

→「中世の黎明」〔大石：1978〕

在庁官人安倍氏の特殊性

船越社をめぐる伝承と『陸奥話記』の記述—「謎」の鳥海柵

「頃年聞鳥海柵名、不能見其体」

実績を積み上げ、自立性と自信を獲得した在庁官人安倍氏の行く末は？

中央政府对蝦夷という図式へのすり替え（『陸奥話記』の論理）

—時代の変化との正面からの対峙を曖昧化

背景に蝦夷への畏怖と差別をないまぜにした

都人の認識の限界

参考文献

大石直正：「中世の黎明」 小林清治・大石直正編『中世奥羽の世界』 東京大学出版会、1978年

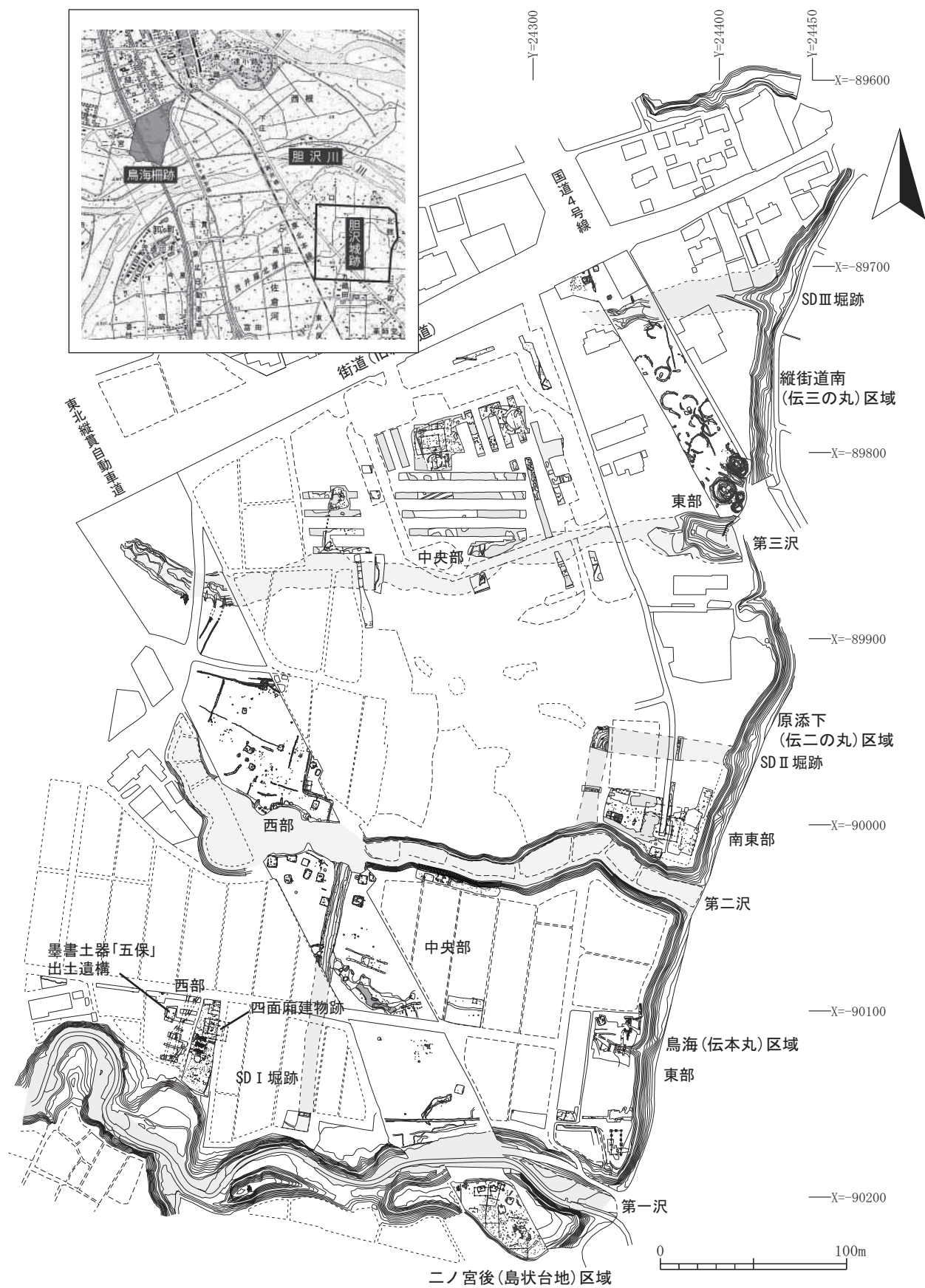
大石直正：「奥羽の荘園と前九年・後三年合戦」 『東北学院大学論集 歴史学・地理学』 17、1986年

熊谷公男：「平安初期における征夷の終焉と蝦夷支配の変質」 『東北学院大学東北文化研究所紀要』 24、1992年

熊谷公男：「『受領官』 鎮守府将軍の成立」 羽下徳彦編『中世の地域社会と交流』 吉川公文館、1994年

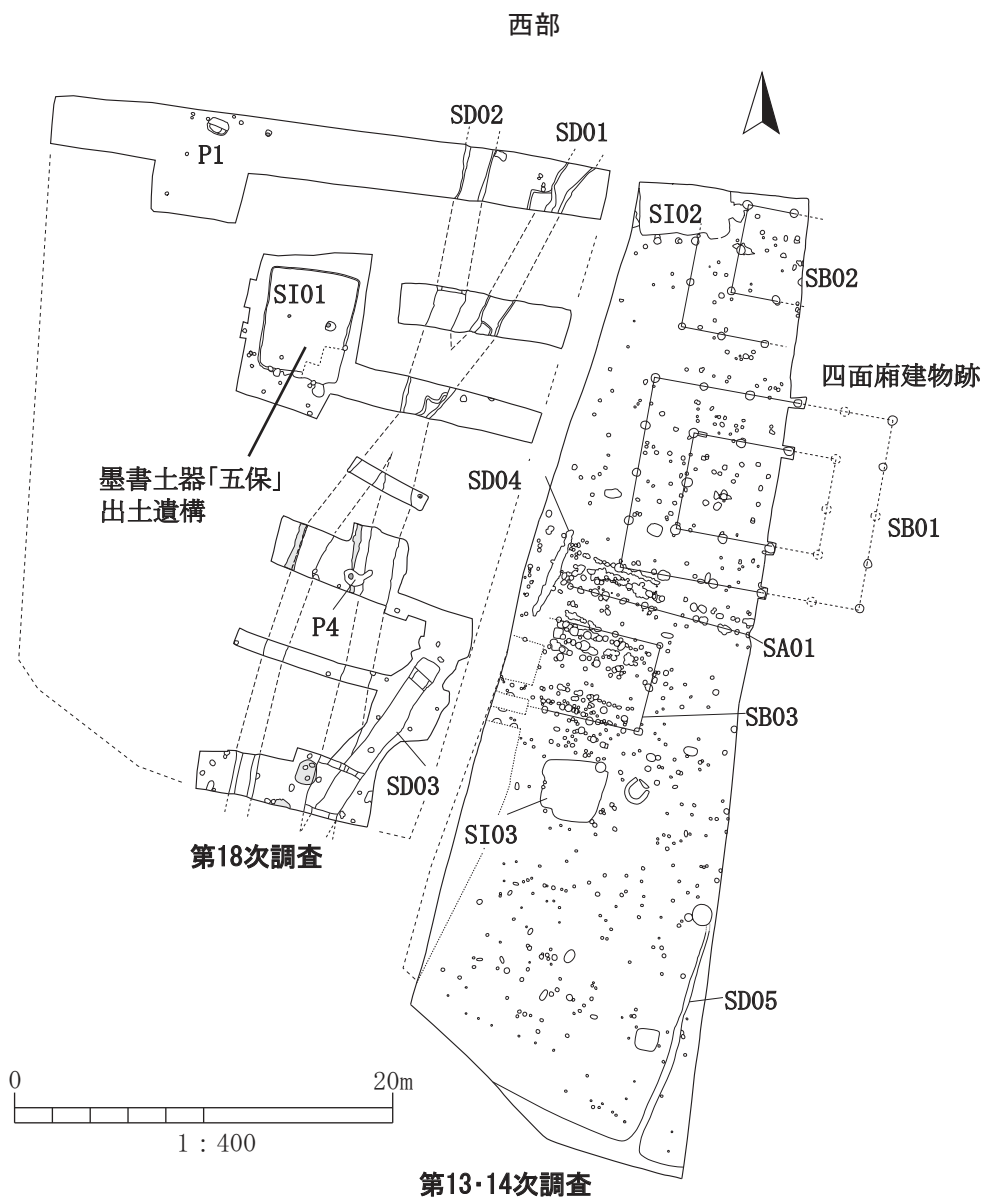
戸川 点：「前九年合戦と安倍氏」 十世紀研究会編『中世成立期の政治文化』 東京堂出版、1999年

渕原智幸：「平安前期東北史研究の再検討—『鎮守府・秋田城体制』批判—」 『史林』 85-3、2002年



鳥海柵跡遺構全体図

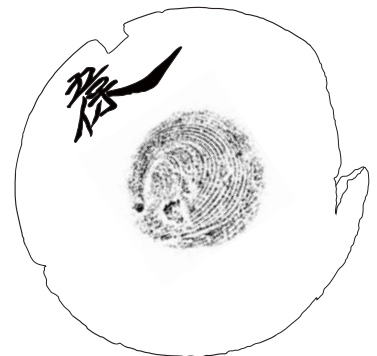
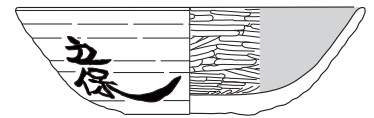
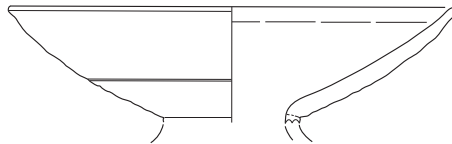
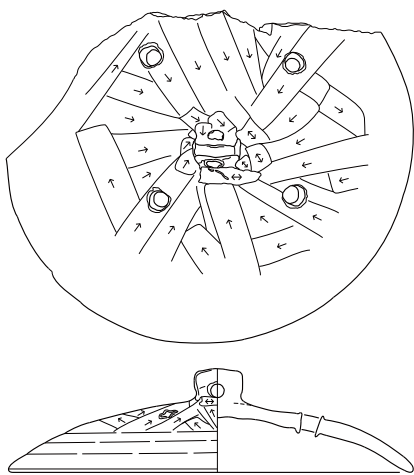
金ヶ崎町教育委員会2013年
『鳥海柵跡 平成22・23年度発掘調査報告書』
金ヶ崎町文化財調査報告書第70集 より



金ヶ崎町教育委員会2013年
『鳥海遺跡 平成22・23年度発掘調査報告書』
金ヶ崎町文化財調査報告書第70集 より



香炉の蓋 緑釉陶器唾壺 墨書土器「五保」



0 5cm



内黒土師器坏墨書「五保」の出土状況



赤外線写真(五保)

金ヶ崎町教育委員会2013年
『鳥海柵跡 平成22・23年度発掘調査報告書』
金ヶ崎町文化財調査報告書第70集 より



第18次調査区 全景（東から）



第18次調査区 SI01竪穴建物跡精査後（南から）



土師器香炉の蓋の出土状況



緑釉陶器唾壺の出土状況

金ケ崎町教育委員会2013年
『島海柵跡 平成22・23年度発掘調査報告書』
金ケ崎町文化財調査報告書第70集 より

MEMO

MEMO

シンポジウム

コーディネーター

／ 本堂寿一氏

元北上市博物館 館長

パネラー

／ 大平聡氏

宮城学院女子大学 教授

／ 高橋信雄氏

花巻市博物館 館長

／ 高橋学氏

秋田県埋蔵文化財センター

主任文化財専門員兼班長

鳥海柵跡周辺の古墳群（西根遺跡調査以前より）

花巻市博物館館長 高橋信雄

金ケ崎町西根地区は、六原扇状地扇端（金ケ崎段丘の縁辺部）に位置し、この周辺にはいくつもの古墳群が存在する。それらは胆沢川、黒沢川の北岸に縦街道、揚場、三反田、桑木田、五郎屋敷、飛鳥田、道場等の古墳群である。

これらの古墳群に関する最も古い記録は、明治30年(1897)の『考古学会雑誌』第6号に記載された三宅米吉の「最北の古墳」である。これは、明治18年(1884)に発掘されて曲玉等の玉類と鉄刀等が出土したことに関する記載である。具体的には、「一、最北の古墳 陸中国胆沢郡西根村にありし古墳は余が知る最北の古墳なり。此の地は胆沢城址を西に去ること十余町、胆沢川の左岸にして地形は稍高き平地なり。古墳は元来数個なりしものの如し。今皆壊崩して其の形を失せるも、明治十八年三月其の一を発掘して中より獲たる遺物は現に同村の共有物とし、昨余年は之を同村及川栄五郎宅に於て見ることを得たり。其の品目は曲玉、切子玉、白玉、小珠、鉄ノ刀、鉞、鏃片にして他の諸所より獲るものと異なる所なし。」と記されている。ここに記されている古墳群は、縦街道古墳群と考えられる。

この縦街道古墳群は、その後大正12年(1923)に宮内省諸陵寮調査員によって調査されている。当時の記録によると、調査の目的は史跡の調査のためでなく皇室に関する不明の古墳調査のためとしている。この頃に発掘された出土品の多くは、当時の帝室博物館（現東京国立博物館）に収められた。

縦街道古墳群は、鳥海柵跡の縦街道南区域の東部に密集しており、昭和の調査時点までいくつかの墳丘が残されており、鳥海柵当時にも破壊された痕跡が認められないので、ここが特別な意味を持つ区画であった可能性がうかがわれる。縦街道古墳出土と想定される出土品には、曲玉、切子玉、白玉、小珠、鉄刀、鉄片、鉞（三宅報告）、大正12年頃出土とされるものには、蕨手刀、直刀、刀子、鉄族等の武具類、和同開珎や鈔帯金具のほか勾玉、切子玉、ガラス玉等の玉類が見られる。特にも律令国家との関係を伺わせる鈔帯金具と和同開珎はこの古墳群の特徴ともいえる。

縦街道古墳群以外の古墳群の記録としては、大野延太郎による明治33年(1900)の「東北旅中散見の遺物」（『東京人類學會雑誌』第二百六号）をあげることができる。「(二)（蕨手刀）も同郡西根村字桑野木田、小丸塚から発見したるものである、其當時の掘出せし有様を聞くに一尺許の自然石十六を四つゝ方形に並列して其の中に細かなる石を並べ厚さ一尺位積み重ねて中央に古劍を横たへ劍頭を西にして配置せられたりと云う、他に何も出ざりしとのことである、初め開墾せざりしときは以て土を丸く盛り上たる塚と同じきものと云う、(三)は五鈴鏡にてこれも同郡金ケ崎村字西根五郎屋敷に於て去る明治二十八年三月十六日に発見せし由、この塚は丸形で直径二間許盛り上げたもので其周圍に巾一間位もあらうと思はれる溝を周らしてありしと云ふ、この外に発見したるものは、直刀、(二)、轡、(二)緒占玉(五)、瑪瑙曲玉、(九)、水晶曲玉、(二)、滑石曲玉、(二)、硝子玉、(六)、水晶切子玉、(五)、鐵鑿、(四)、等の種々なるものが出でたれども、このものは今は何れか散亂したと云うことであります、」【資料1】明治33年に大野が報告した上記の古墳群は、鳥海柵跡の西に隣接する桑木田古墳群と五郎屋敷古墳群と想定される。

桑木田古墳群は、大野の報告では桑野木田小丸塚とあるが、現地名にある桑木田古墳群として捉えられる。この古墳は、一尺余の石を四方に厚さ一尺位積み重ねた中から蕨手刀が出土している。この状況は、北上市の江釣子古墳群や花巻市の熊堂古墳群にみられる川原石積古墳と類似しており、出土遺物からも同様の古墳であったと考えられる。

また、五郎屋敷古墳は、直径二間許の円墳であり、当時周溝も残存していたことが分かる。五鈴鏡は、古墳時代の鏡としては岩手県内唯一のものであり注目される。鈴鏡は東北でも8例しか確認されていない貴重な資料である。【資料1】

○申妻の落葉

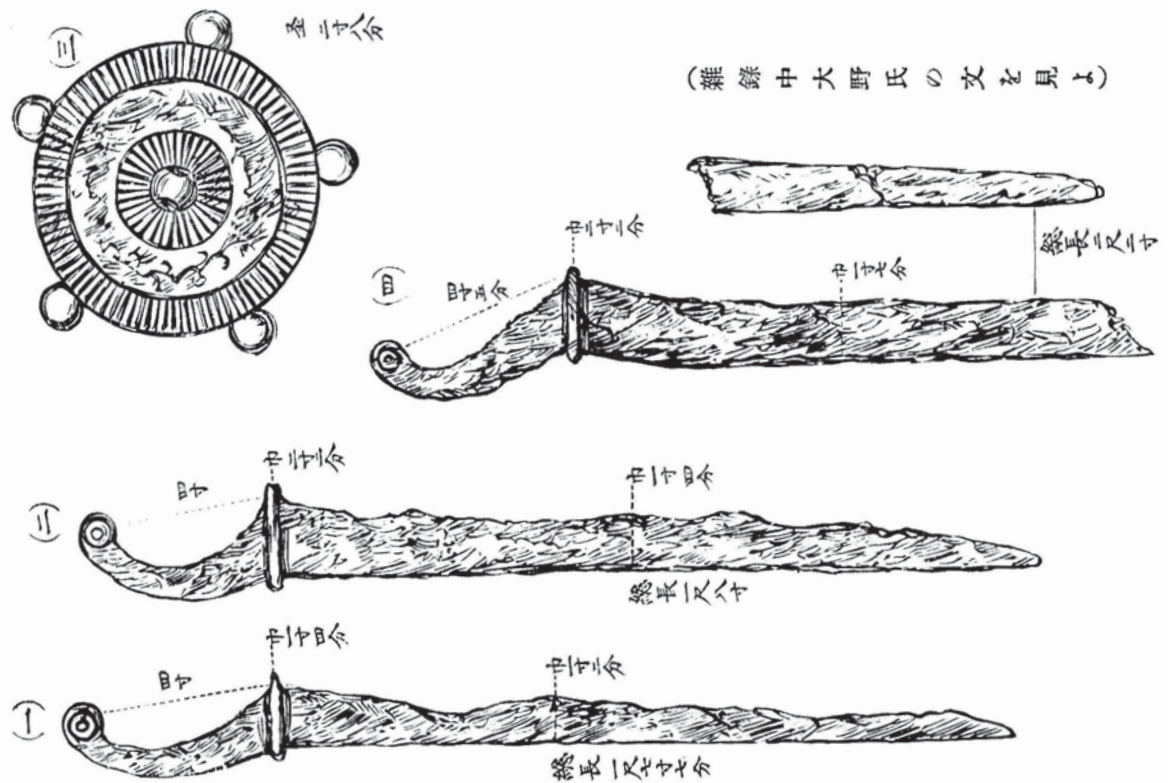
茄子、枝豆等勝手に盗むことを互に許したりとぞ、中府の近在にては八月十五夜に人の畑物を盗むも咎る者なし
○申送り 千塚村申送りを致すとさし故廿五年七月廿九日舊曆六月六日に當る日見物に行く村人多人數々手毎に長き松明を持ち大數はら貝を吹き立て大聲に先達の者ヲクレヲクレイネノムシヲヲクレと呼はれば一同進呼し村はづれの地迄送り行き一同松明を集め焼捨て歸る村々により日を異にすれば送り方は同じと聞く(未完)

○東北旅中散見の遺物(卷首圖を見よ)

大野延太郎

第一圖の(一)は廣手形の古劍にて陸中國膽澤郡水澤町鹽釜字日高神社の西小石森塚に於て去る明治三十三年十月十八日掘り得たとのことで同所の石原八右衛門氏の所有である、(二)も同郡西根村字桑野木田、小丸塚から發見した

るものである、其當時の掘出せし有様を聞くに一尺許の自然石十六を四つ、方形に並列して其の中に細かなる石を並べ厚さ一尺位積み重ねて中央に古劍を横たへ劍頭を西にして配置せられたりと云ふ、他に何も出てさうしとのことである、初め開鑿せざりしときは土を以て丸く盛り上たる塚と同じきものと云ふ、(三)は五鈴鏡にてこれも同郡金ヶ崎村字西根五郎屋敷に於て去る明治二十八年三月十六日に發見せし由、この塚は丸形で直徑二間許盛り上げたるもので其周圍に巾一間位もあろうと思はれる溝を周らしてありしと云ふ、この外に發見したるものは、直力、(二)轡、(二)緒占玉、(五)瑪瑙曲玉、(九)水晶曲玉、(二)滑石曲玉、(二)硝子玉、(六)水晶切子玉、(五)鐵鑿、(四)等の種々なるものが出てなれども、このものは今は何れか散亂したと云ふこととありさす、(四)も右の古劍と同形式にて少しそのところ異りて聊か長しされども(一)(二)と同形式である、去る明治二十七年中に掘り得たるものにて出所は羽後國南秋田郡湯西村大字鶴木殿裏が臺と云ふ、古墳から發見せりと外に祝部土器も出て、又た別

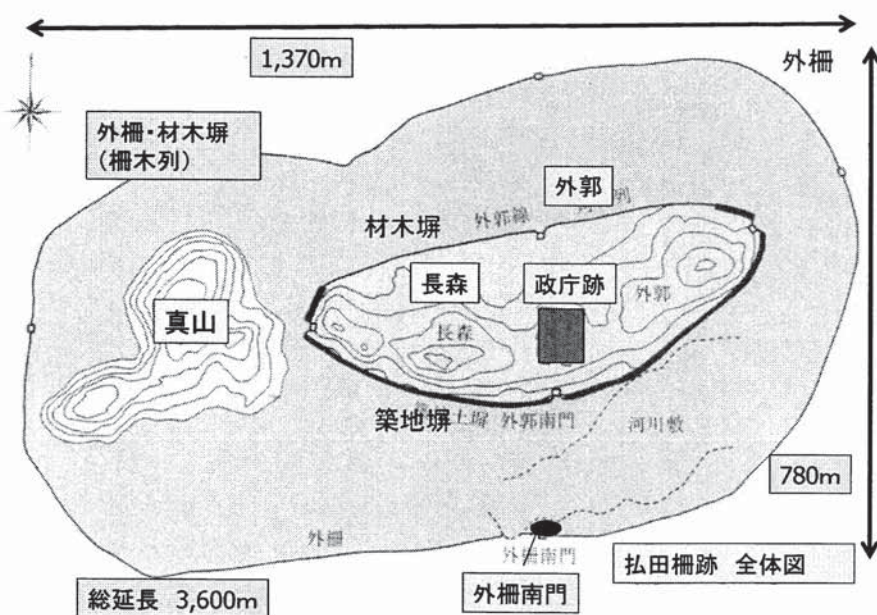
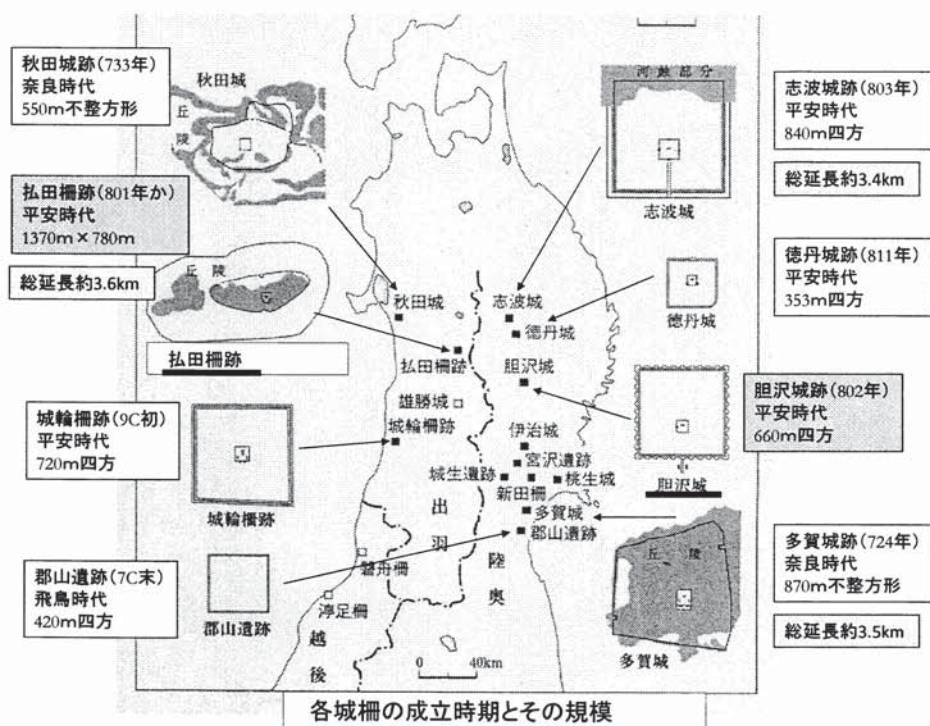


(雜錄中大野氏の文を見よ)

鳥海柵・安倍氏と出羽側、大鳥井山・清原氏の対比

秋田県埋蔵文化財センター 高橋 学

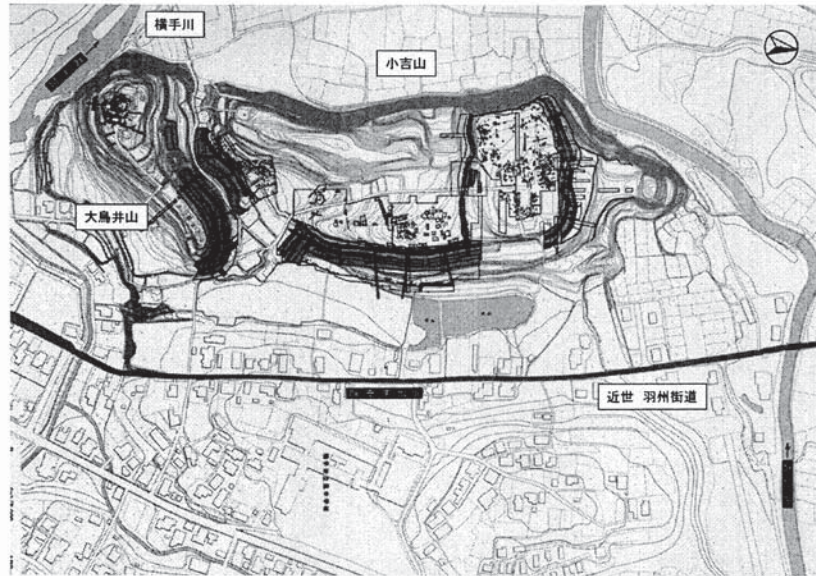
		陸 奥	出 羽
律令期の城柵		胆沢城〔いさわじょう〕	払田柵〔ほったのさく〕
安倍氏 清原氏 登場前 段階	成立時期	802年〔日本紀略〕	801年頃〔年輪年代測定〕
	造営者	坂上田村麻呂	不明
	支配領域	陸奥北部、奥六郡(北上川中流域)	出羽北部・内陸、山北三郡(横手盆地)
	支配特性等	鎮守府(808年に国府多賀城から移設)	(759年造営、雄勝城の後継城柵＝第2次雄勝城か)
	立地	平地(胆沢扇状地)	平地＋2つの独立丘
	外郭(外柵)規模と形状	一辺670mの方形(外郭)	東西1370m、南北780mの楕円形(外柵)
	外郭(外柵)区画施設	築地(基底幅3m)・外溝(幅4.5m)・内溝(幅3m)	材木堀(杉材、推定地上高3.6m)
	政庁域の規模・形状と区画施設	一辺90mの方形、大垣(築地)と内溝(幅2.5m)	約64m×61mの方形、板堀(創建期)
	隣接する大河川	北上川	なし
	城柵内の小河川	九蔵川	あり
	四面庇建物跡	あり(11棟)	なし
	城柵に係る上級官人の居館	伯済寺遺跡(城跡の南約400m)	不明
	終末時期	10世紀後半	10世紀後半
在庁官人		安倍氏	清原氏
出自		蝦夷or中央貴族(軍事貴族)	
安倍氏・清原氏の拠点施設		鳥海柵	大鳥井山
	律令期以前の土地利用	西根遺跡・縦街道古墳群(7～8世紀)	(縄文時代に利用)
	律令期の土地利用	9世紀後半から胆沢城関連遺跡、ただし10世紀中頃で一度断絶か	なし
	成立時期	11世紀前半	10世紀後半(払田柵存続期と一部重複)
	施設の位置	胆沢城の北西約2km	払田柵の南約16km
	隣接する大河川	北上川・胆沢川	横手川
	立地	平地(金ヶ崎段丘)	2つの独立丘
	規模と形状	南北約500m、東西約300mの長方形状(不整形)	南北約600m、東西約250mの楕円状(不整形)
	主要地区	4地区(二ノ宮後、鳥海、原添下、縦街道南)	2地区(小吉山、大鳥井山)
	外郭の区画施設	自然沢・堀・柵列	材木堀のち土塁・空堀
	四面庇建物跡	あり(4棟)	あり(1棟)
滅亡に至る合戦		前九年合戦(～1062年)	後三年合戦(～1087年)
その後の土地利用		宗教施設・経塚か	宗教施設・塚など
伝 承		多(安倍館など)	少(清原館はない)



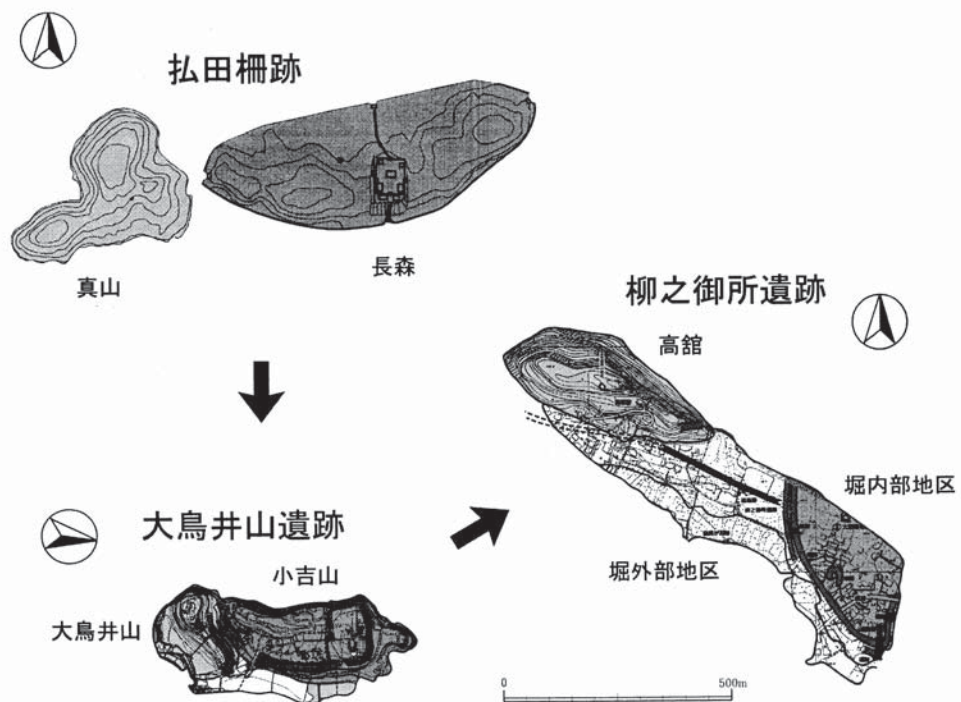


大鳥井山遺跡





横浜市大鳥井山遺跡 全体図



弘田柵をモデルとする景観変遷試案

MEMO

平安時代の東北地方の主要遺跡

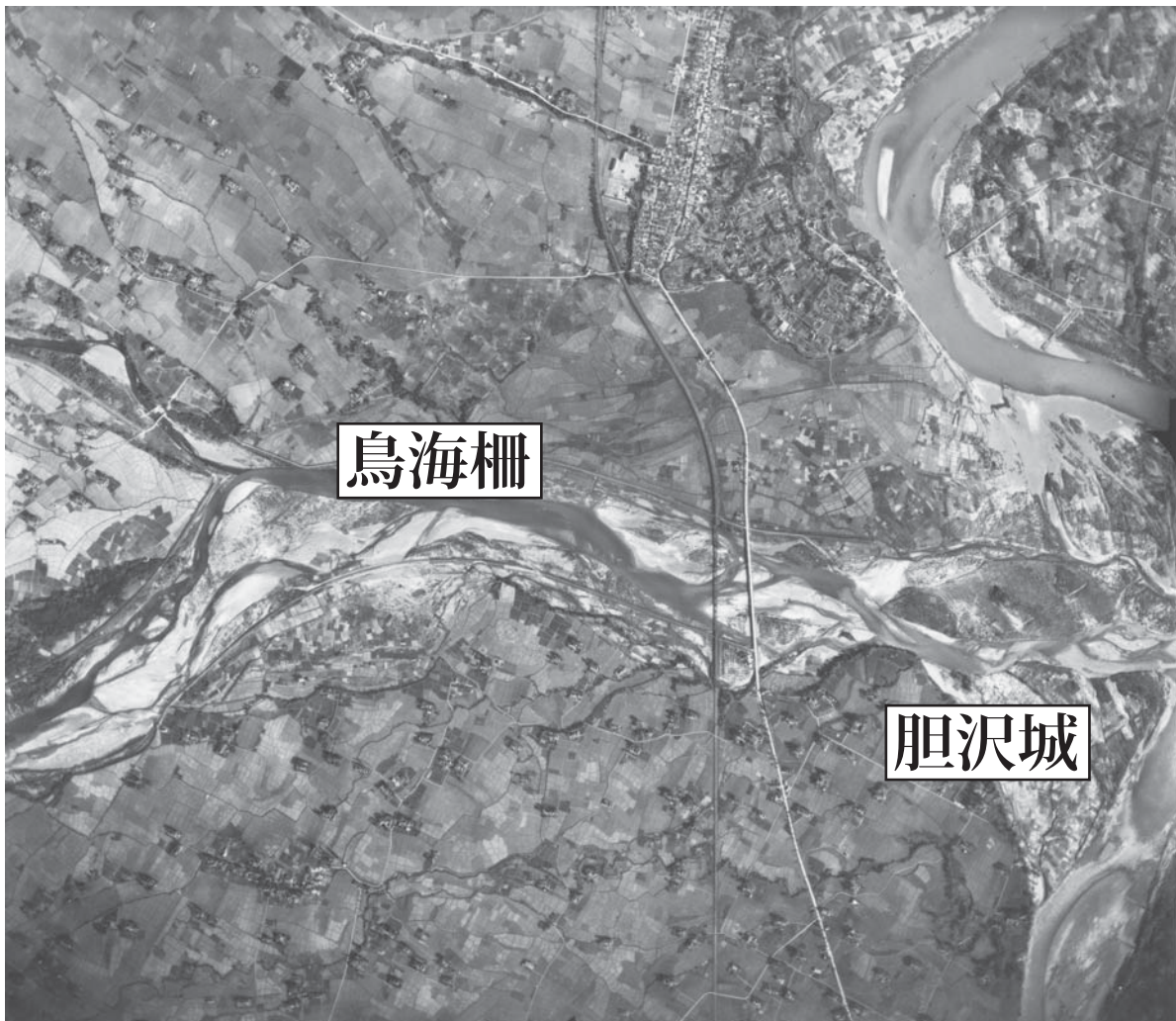


金ケ崎町教育委員会2013年
『鳥海柵跡 平成22・23年度発掘調査報告書』
金ケ崎町文化財調査報告書第70集 より

胆沢城と鳥海柵



平成22年（2010）胆沢城跡と鳥海柵跡（南から）

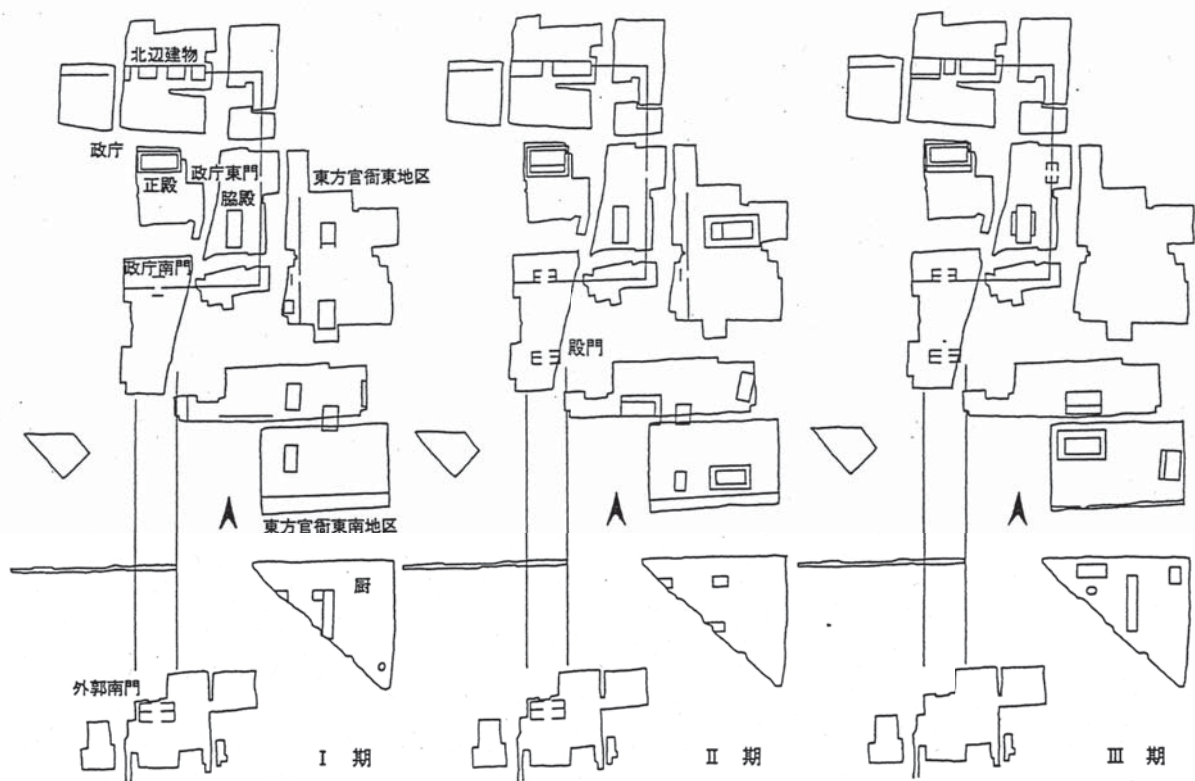


昭和23年（1948）航空写真

胆沢城全体図・遺構変遷図



胆沢城全体図



胆沢城跡 政庁・東方官衙遺構変遷図

関連史料年表

西暦	年号	月	出来事	出典
802	延暦21	1	胆沢城 が造営される。駿河国等10国の浮浪人4000人を胆沢城に移住させる。	日本紀略
		7	蝦夷の阿弭流為と母礼が降伏する。	日本紀略
		8	蝦夷の阿弭流為と母礼が処刑される。	日本紀略
803	延暦22	2	越後国から造紫志波城所に米3000石と塩30石が送られる。	日本紀略
804	延暦23	5	志波城と 胆沢郡 の間に駅を設置する。	日本紀略
(808)	(大同3)	(7)	この時まで、鎮守府が多賀城から 胆沢城 に移される。	日本後紀
811	弘仁2	1	坂上田村麻呂を征夷大將軍に任じる。和我・稗縫・斯波郡を設置する。	日本後紀
		閏12	志波城を移転することが決まる。	日本後紀
812	弘仁3	9	蝦夷の竹城公金弓など122人に陸奥磐井臣の姓を与えて公民とする。	日本後紀
814	弘仁5	11	胆沢城 と徳丹城に糒と塩に貯蓄させる。	日本後紀
815	弘仁6	8	陸奥国の軍制改革の一環として、胆沢城の守備体制が兵士400人・健士300人となる。	類聚三代格(巻18)
834	承和1	7	鎮守府で「鎮守府印」を用いることとする。	続日本後紀
835	承和2	2	俘囚の吉弥侯宇加奴などに物部斯波連の姓を与える。	続日本後紀
839	承和6	4	胆沢城 と多賀城の間の地域の防衛体制の不備が問題とされ、兵士が増援される。	続日本後紀
841	承和8	3	江刺郡擬大領の上毛野胆沢毛人に外従五位下を仮に授ける。	続日本後紀
843	承和10	9	鎮守府に府掌を置く。	続日本後紀・類聚三代格(巻15)
862	貞観4	6	鎮守府の石手堰神を官社とする。駒形神に従四位下を授ける。	日本三代実録
		12	黒石寺の薬師如来像が造られる。	黒石寺薬師如来像銘
869	貞観11	5	陸奥国で大地震が起きる。	日本三代実録
876	貞観18	6	鎮守府で最勝講と吉祥悔過を行う。	類聚三代格(巻2)
878	元慶2	7	出羽国で元慶の乱が起こる。	日本三代実録
881	元慶5	5	蝦夷訳語の物部斯波永野に外従五位下を授ける。	日本三代実録
882	元慶6	9	鎮守府に陰陽師を置く。	類聚三代格(巻5)
10世紀初頭			奥六郡が成立する。	
915	延喜15	7	出羽国が火山灰が降下・堆積していると報告する。(十和田a火山灰の降下か)	扶桑略記
1036	長元9	12	安倍忠好を陸奥権守に任じる。	範国記
1047	永承2	2	興福寺僧房の再建費用の一部が陸奥国の藤原時貞・藤原家政・藤原経清らに割り当てられる。	造興福寺記
			この年、黒石寺の伝慈覚大師造が造られる。	黒石寺伝慈覚大師像銘
(1050)	(永承5)		前九年合戦 が起る。陸奥守藤原登任と出羽城介平繁成が安倍頼良を攻撃するが、鬼切部で敗れる。	陸奥話記 等
1051	永承6		源頼義を陸奥守に任じる。	陸奥話記・本朝続文粹 等
1052	永承7	5	大赦があり安倍頼良が許される。安倍頼良は源頼義に遠慮して名を頼時と改める。	陸奥話記

西暦	年号	月	出来事	出典
1053	天喜1		源頼義に鎮守府將軍を兼任させる。	本朝文粹・大間成文抄
1056	天喜4		阿久利河での人馬殺傷事件の嫌疑が安倍貞任にかけられたため、安倍頼時は衣川関を閉じて戦闘態勢に入る。	陸奥話記
		8	源頼義が追討宣旨を得て安倍頼時と戦う。	陸奥話記・帝王編年紀 等
		12	源頼義を再び陸奥守に任じる。	陸奥話記・百鍊抄・扶桑略記
1057	天喜5	7	安倍頼時が源頼義側についた安倍富忠の説得に向かうが合戦となり、頼時は流矢にあたり 鳥海柵 に戻るがそこで死去する。	陸奥話記・百鍊抄
		8	東山・東海道諸国に陸奥国へ兵糧を運ばせることとする。	扶桑略記
		9	源頼義が安倍頼時の戦死を報告し、残党を降伏させるために諸国からの兵士と兵糧を徴発することを申請する。安倍頼時戦死の確認のために官使を派遣する。	陸奥話記・扶桑略記・百鍊抄 等
		11	黄海の戦がおこる。源頼義側が大敗する。	陸奥話記・扶桑略記・一代要記
(1058)	(康平1)		この頃、安倍貞任・藤原経清らが衣川関以南に出て徴税を行う。	陸奥話記
1062	康平5		高階経重を陸奥守に任じるが、人々が源頼義の指揮に従うために、経重は帰京する。	陸奥話記・扶桑略記
			出羽の清原武則が一万余の兵を率いて陸奥国に向かう。源頼義も三千の兵を率いて陸奥国府を出発する。	陸奥話記・扶桑略記
		8	源頼義軍と清原武則の軍が栗原軍営岡で合流する。小松柵の戦がおこる。	陸奥話記・扶桑略記
		9	安倍貞任は反撃を試みるが迎撃されて衣川関・ 鳥海柵 へと逃げる。源・清原軍は衣川関・大麻野・瀬原柵を攻め落とす。安倍貞任・藤原経清は 鳥海柵 を捨てて厨川柵へと撤退し、源・清原連合軍は 鳥海柵 に入るとともに、黒沢尻柵・鶴脛柵・比与鳥柵を攻め落とし、北進を続ける。源・清原軍は厨川柵を攻め落とし、安倍貞任は戦死し、藤原経清は斬首される。安倍宗任は逃走するが、数日後に降伏する。	陸奥話記 等
		10	安倍貞任を討ったとの源頼義の報告が奏上される。	定家朝臣記・十三代要略 等
1063	康平6	2	安倍貞任・重任・藤原経清の首を西獄にさらす。恩賞として源頼義を伊予守、義家を出羽守、清原武則を鎮守府將軍、物部長依を陸奥大掾、源義綱を左衛門少尉、藤原季俊を左馬允に任じる。	水左記・陸奥話記・魚魯愚鈔 等
		5	逃亡していた安倍正任と僧良昭が出頭する。	陸奥話記・朝野群載(巻11)
1064	康平7	2	源頼義が捕虜となっていた安倍宗任らの処分を求める。	朝野群載(巻11)
1069	延久1	3	安倍宗任らの処分について協議され、安倍宗任・家任とその従類は頼義の任国である伊予国に、僧良昭を大宰府に移す命令を出す。	朝野群載(巻11) 等

西暦	年号	月	出来事	出典
1071	延久3	5	前九年合戦の追善のために大般若經の供養を行う。	皇代記
			陸奥守源頼俊が閉伊七村の山徒と衣曾別嶋の荒夷と戦う(延久の合戦)。	朝野群載(巻11)
1083	永保3		後三年合戦が起る。清原真衡と清原清衡・家衡が対立し、源義家が介入する。	奥州後三年記 等
			清原真衡が病死したために停戦が成立し、源義家は清原清衡・家衡に奥六郡を分け与える。	康富記
(1086)	(応徳3)		清原清衡と清原家衡が対立し、陸奥守源義家が清衡側に付く。	康富記
			源義家が沼柵を攻めるが敗れる。	康富記
			清原武衡が家衡に加勢して、金沢柵に移る。	後三年合戦絵詞
			源義光が無断で陸奥国に下向する。	後三年合戦絵詞
1087	寛治1	9	源義家が金沢柵を攻める。	後三年合戦絵詞
		11	金沢柵が陥落し、清原武衡は斬首、家衡は射殺される。	後三年合戦絵詞
		12	源義家が清原武衡等を討伐したことを報告し、追討官符の発給を求める。	中右記・本朝世紀・ 百鍊抄 等
1092	寛治6	6	陸奥国から藤原清衡が合戦を企てているとの報告が届く。	中右記
(1095)	(嘉保2)		この頃、藤原清衡が江刺郡豊田館から磐井郡平泉に拠点を移す。	吾妻鏡
1098	承德2	12	成島毘沙門堂の毘沙門天像が造られる。	毘沙門堂毘沙門天像内胎 内墨書
1105	長治2	2	藤原清衡が最初院を平泉に建立する。	中尊寺文書・ 中尊寺梵鐘銘
1119	元永2	5	江刺郡益沢院で『大品經』巻三十の書写が終わる。	金剛峯寺所藏大品經卷三 十奥書
1126	大治1	2	藤原清衡が中尊寺を建立する。	中尊寺文書
		3	蓮光を中尊寺経蔵別当職に任じる。	中尊寺文書
1128	大治3	7	藤原清衡が死去する。	中右記目録・吾妻鏡
1140	保延6	3	連光が中尊寺経蔵別当職を蓮心に譲る。	中尊寺文書
1154	仁平4	3	連光が伊沢郡所在の金色堂免田・供養法田を蓮心に譲与する。	中尊寺文書
(1157)	(保元2)		この頃までに、藤原基衡が毛越寺を建立する。	吾妻鏡
			この頃、藤原基衡が死去する。	吾妻鏡
1170	嘉応2	5	藤原秀衡を鎮守府將軍に任じ、従五位下を授ける。	兵範記・吾妻鏡
1181	養和1	8	源頼朝追討のため、藤原秀衡を陸奥守に任じる。	吉記・玉葉
1187	文治3	10	藤原秀衡が死去する。	玉葉・吾妻鏡 等

金ケ崎町教育委員会 2013 年
『島海柵跡 平成 22・23 年度発掘調査報告書』
金ケ崎町文化財調査報告書第 70 集より

金ケ崎町の安倍氏関連伝承地

金ケ崎町では、主に胆沢川の流域と、胆沢川・北上川の合流点に伝承地が分布する。

①胆沢川上流域

永栄小歩地区には、宗任が居住したとされる安倍館(通天館)を中心として、大歩(奥州市胆沢区)、小歩の地名と、古代駅路と伝えられる樵路がみられる。

大歩、小歩は、貞任と義家の緊張感のない合戦のありようを思わせる。樵路は安倍館から東に延びている小道であるが、館と道のセットの存在は、館が持つ機能や広がりを考えさせられる。しかし、館と道については発掘調査によって明らかされるほかにない。

②胆沢川下流域

永栄・永沢地区には、貞任居城と伝えられる柏山館(大林城)を中心にして、八幡太郎義家が陣を敷いた九石の八幡館、義家が胆沢川を渡る際に濡れた銭を干した銭干石。さらには義家勧請の樋田の駒形社、そして寺伝によれば後三年合戦で兵火を被ったという大林の観音寺と馬船観音像などがある。

柏山館の巨大さは安倍氏の奥六郡の支配者としてのゆるぎない力を示していると考えられる。一方八幡太郎が陣を敷いた八幡館は、安倍氏の居城とされる柏山館の十分の一もない小さな城跡である。源氏は小さな八幡館に陣を敷いて安倍氏を倒し、その強さを表した。

③胆沢川と北上川の合流点

鳥海柵跡を中心として、金ケ崎城跡、本宮観音堂、諏訪神社(現金ケ崎神社)、船越社がある。

諏訪神社の縁起について、境内にある安永7年(1778)『諏訪詞碑』には、律令の道理に従わない「無道安倍氏」征伐のため、源頼義、義家父子が諏訪大神に祈念し、目的を遂げる事ができたので祀ったという。本宮観音堂は源氏が宿陣した所に祀ったと安永5年(1776)の風土記では伝えている。金ケ崎城は、安倍氏一族が住し、また貞任の女「白糸姫」も住んだことから「白糸城」とも呼ばれる。

源氏が宿陣した所に祀った本宮観音堂は、近代に入ると次のような伝承となる。大正10年(1921)の『金ケ崎村史』、昭和9年(1934)の『金ケ崎町誌』によれば合戦で負け生け捕りにされた八幡太郎義家が、金ケ崎城に幽閉されていたが、貞任の女「白糸姫(尾ノ上前)」が、義家に懸想し、一夜をともにした。義家は姫に貞任の強さの理由を尋ねると、「神通の巻物」にあるといい、それを持ち出し義家に渡してしまう。このことで安倍氏は敗北、貞任は白糸姫を生き埋めにしたという。義家は生き埋めの地に観音様を祀り、白糸姫の女房たちに西根十二郷を与えて弔わせたという。これが本宮観音堂と、西根の始まりとしている。白糸姫の悲恋物語として今日もお語り継がれているものである。

鳥海柵跡の南端部の二ノ宮後区域の西端に、船越社が祀られている。安永5年(1776)の風土記によれば、康平5年(1062)、源頼義、義家が安倍氏を追ってこの地に来た時、胆沢川は洪水で渡れなかった。しかしどこからともなく老翁が船に乗って現れ、源氏軍を運んだ。義家はこの事を奇に思い、また感謝して「船越大明神」として祀ったという。

④伝承からみる鳥海柵

金ケ崎町西根鳥海地内は伝承分布と近世・近代の資料が一致することについては、先述のとおりである。

金ケ崎町以外の伝鳥海柵の場所については、安倍氏に関連する伝承は多くないが、伝承の少なさだけで柵があったことを否定することはできない。各地は、いずれも地元の人々や記録によってその場所が鳥海柵だと伝えられてきた事実がある。

しかし、伝承をもとにして鳥海柵の場所を考えた場合、北上川と胆沢川の合流地点周辺から金ケ崎町西部の胆沢川に沿っての伝承の分布状況は一定の範囲でまんべんなく広がっている。鳥海柵の存在が、その周辺の土地において人々の暮らしに入りこみ、それにともない安倍氏とともに語り継がれていくことになったと考えられる。

伝承は、全てがその当時から伝わっているものであるとは限らない。「無道安倍氏」の鳥海柵は、將軍頼義に「不能見其体」と言わせるほどのものであった。その鳥海柵の重要さは後世まで認識され、人々が多くの伝承を今に伝えてきたと考えられる。

金ケ崎町の安倍氏関連伝承一覧

伝承地	所在地	内容	出典
安倍館 (通天館)	永栄門前	宗任居城。	『金ケ崎町史』(1965)より『書出 曹洞宗報恩山永徳寺』(1776)
樵路徑	永栄門前	宗任居住の際の駅路。	『金ケ崎町史』(1965)より『書出 曹洞宗報恩山永徳寺』(1776) 『永岡村の歴史』(1959)
小歩	永栄小歩	義家が貞任討伐の際小歩(小股)で歩いた。	『金ケ崎町史』(1965)
愛宕社(永栄)	永栄 愛宕河原(現存せず)	頼義義家が建立。	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記御用書出 永徳寺村』(1776)
大林城 (百岡城)	永沢松本館、永栄西柏山他	大林城は昔百岡城ともいい安倍氏の砦であった。貞任の女姉妹も居城していたが、姉妹揃って義家に懸想し、城内の機密を漏らしたため落城したといわれる。	『永岡村の歴史』(1959) 『柏山館跡遺跡報告書』(1990)
菊が森	永栄西柏山か	貞任の娘(妹とも)であるお菊とお鶴が義家に自軍の機密を漏らし、処刑された。後世の人がお菊のために塚をたて、その塚は菊が森と呼ばれたが今はない。	『永岡村の歴史』(1959) 『柏山館跡遺跡報告書』(1990)
つるべおとし	六原 (詳細位置不明)	貞任の娘(妹とも)であるお菊とお鶴が義家に自軍の機密を漏らし、処刑された。お鶴は六原丸森の難所から深い谷に投げ落とされた。後世の人がそこを「つるべ落とし」と名付けた。	『永岡村の歴史』(1959) 『柏山館跡遺跡報告書』(1990)
八幡館	永栄九石	前九年合戦・後三年合戦の際に義家が拠った所。	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記御用書出 百岡村』(1776)
銭干石	永沢平林	義家が胆沢川を渡る際に濡れた銭を干した石といわれる。その石に義家の馬が足をかけ、蹄の跡が残った。	広報かねがさき第283号(1977)
樋田駒形神社	永沢橋本後	源頼義勧請	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記御用書出 永澤村』(1776) 『柏山館跡遺跡報告書』(1990)より『封内風土記巻之十九 永澤邑』
観音寺廃寺	永沢大林	後三年合戦の兵火にあったが、馬船観音のみかろうじて戦火を免れた。	『金ケ崎町史』(1965)より『書出 眞言宗功德山観音寺』(1776)
鳥海柵	西根縦街道南、原添下、二ノ宮後、鳥海	安倍宗任(鳥海彌三郎)の館。	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記御用ニ付書上控 西根村』(1776) 町内アンケート(2010)
船越社	西根二ノ宮後	源義家父子貞任討伐の際、胆沢川が洪水で渡れなかったが、船に乗った翁が現れ渡してくれたのを不思議に思い祀った。	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記 西根村』(1763)、『風土記御用ニ付書上控 西根村』(1776) 町内アンケート(2010)
諏訪社 (金ケ崎神社)	西根諏訪小路	源頼義勧請	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記 西根村』(1763)、『風土記御用ニ付書上控 西根村』(1776)
本宮観音堂	西根本宮	・源義家が安倍貞任を追討した際、陣場に勧請した。 ・安倍貞任の娘白糸姫が自軍機密を漏らし生き埋めにされた。白糸姫を弔うため義家が建立した。 ・安倍貞任の娘白糸の前の墓所。 ・観音堂前には安倍宗任(源義家とも)が掘った櫛清水があった。 ・鎌倉権五郎眼洗いの池 ・宝寿院什物(義家の鏡・貞任着用脚絆)	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記 西根村』(1763)、『風土記御用ニ付書上控 西根村』(1776)、『書出 寶壽院』(1776)
金ケ崎城 (白糸城)	西根仮屋	安倍貞任の叔父河堰太夫為行の居城で、貞任没落後、頼時の娘白糸前が居住した。また義家が貞任討伐後に宿陣した。	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記御用ニ付書上控 西根村』(1776)
西根十二郷	西根	安倍貞任の娘白糸姫(尾上前)の菩提観音を守護させるため、源義家が十二郷を女房たちに与えた。	『金ケ崎町誌』(1934) 『金ケ崎町史』(1965)
倉馳社	三ケ尻 瘤木	源義家が立ち寄った。	『金ケ崎町史』(1965)より『風土記 三ケ尻村』(1763)

伝承地	所在地	内容	出典
片葉の芦	西根壇原	源義家が戯れに芦を薙ぎ払ったところ、片葉の芦しか生えなくなった。	『金ヶ崎町史』(1965)
橈引沢と虚空蔵様	西根 橈引沢	源義家が産気づいた妻を橈に乗せ降りてきたところが橈引沢、子供が生まれた所に虚空蔵様を祀った。	中央センター伝承地調査(2010)
八幡館と八幡宮跡(杉の宮)	西根大森	頼義・義家の陣屋。岩に鎬矢を立て武運祈願をした地(八幡宮は焼失・杉の木のみ残る)	『金ヶ崎町史』(1965)より『風土記 西根村』(1763)、『風土記御用ニ付書上控 西根村』(1776)
頭無川	永沢 鳥の海	貞任と義家の合戦で流れた大量の血が小川となり、その水源がないという。	『永岡村の歴史』(1959) 『金ヶ崎町史』(1965)
愛宕社	西根改断	源義家建立 一本松の傍にある	『金ヶ崎町史』(1965)
一本松(見当松)	西根改断	源義家が植えた松。義家が目標にして進軍したともいわれる。	『金ヶ崎町史』(1965) 町内アンケート(2010)
愛宕社(藤巻)	西根藤巻	源義家勧請(詳細不明)	『金ヶ崎町史』(1965)より『風土記 西根村』(1763)、『風土記御用ニ付書上控 西根村』(1776)
駒形神社	西根 雛子沢	源義家が太刀を奉納した。	『金ヶ崎町史』(1965)より『書出 光善院』(1776)
伊勢社	西根 赤稲田(現存せず)	源義家勧請	『柏山館遺跡報告書』(1990)より『風土記御用書出』(1776)
伊勢社(川目)	西根 川目荒谷	源義家勧請	『金ヶ崎町史』(1965)より『風土記 西根村』(1763)、『風土記御用ニ付書上控 西根村』(1776)
惣前森馬頭 観音堂之跡	不明	源義家勧請の観音堂跡	『金ヶ崎町史』(1965)より『風土記 西根村』(1763)



船越社(西根二ノ宮後)



本宮観音堂(西根本宮)

金ヶ崎町内の安倍氏関連伝承地

金ヶ崎町教育委員会 2013 年
『鳥海柵跡 平成 22・23 年度発掘調査報告書』
金ヶ崎町文化財調査報告書第 70 集より

金ヶ崎町の安倍氏関連伝承地

